



2013年8月21日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(11) 大黃甘草湯 (だいおうかんぞうとう)

この処方のキーワードは「便秘」です。

弁証のキーワードは ①便秘、②腹満、③時に吐く、です。

(どんな処方か?)

大黃甘草湯は胃熱に因る便秘を治す処方です。

総ての漢方処方は寒か熱か、補か瀉かの基本的性質を持っています。このうち補剤は虚証で正気が不足して病を自力で治せないとき薬で生気の生産を高め治癒力を補ってやる薬、これに対し瀉剤とは体に発生した病邪を直接排除するもので、即ち体外に排泄するか邪をその場から動かしてやる薬です。邪を体外に排泄する瀉剤には大別して、汗にして出す発汗剤、尿から出す利尿剤、及び大便にして排泄する瀉下剤の三種があります。

食物を摂取した後不要になった老廃物は大便として速やかに体外に排泄される必要があります。その作用が正常に行なわれないと、食物は漢方で云う食積や宿便となって胃腸内に停滞・蓄積して便秘を生じます。便秘は体内に生じた最悪の実邪の一つですから、適当な瀉下剤を用いて速かに排泄しなくてはなりません。

大黃甘草湯は最も代表的な瀉下剤の一つです。

使用目標は便秘腹満して大便燥結、そのため食欲が無く無理に食べると時に反射的に嘔吐することがある。口渴があり、腹は堅く膨満して押えると痛む、舌には黄苔が見られ、

脈は数で有力などです。

(大黃甘草湯の原典)

大黃甘草湯は『金匱要略』の嘔吐噦下利脈証治第十七という胃腸の病を論じた篇に出てくる処方です。

「食シ已レバ即チ吐ス者ハ大黃甘草湯之ヲ主ル」(17)とあり、本来は胃腸実熱の嘔吐症の薬です。条文の意味は胃腸に実熱が充満しているため胃気が正常に下降できず、大腸はその伝導の機能を果たせず、大便も秘結すると共に胃気が上逆するので病人は食べると反射的に嘔吐する有様とその治方を述べています。

(大黃甘草湯の処方構成)

大黃甘草湯は大黃と甘草の2味から成る非常に簡潔な処方です。

当然大黃が主役で君薬・臣薬を兼ねています。性味は苦・寒で強い瀉下作用と清熱作用を持ち漢方では無くてはならない攻下薬の代表です。組み合わせる生薬によって瀉下剤になったり、清熱薬として働いたりします。附子や乾姜・細辛などの温薬と配合すれば寒性の便秘を治すこともできます。薬効が強烈であるため將軍という別名があり、胃腸内に積滞した物を総て排泄して一新させる薬という意味から推陳致新の薬とも言われています。

大黃は主に中国西北部の高山地帯に自生しているタデ科の多年草ダイオウ類の根や根茎から得られる生薬ですが、国産品も有り江戸時代に日本に渡来して奈良県などで栽培されて来た唐大黃や、最近では八ヶ岳山麓や北海道で栽培されている新種もあります。大黃の下剤成分はセンノサイド類で腸内細菌叢でレインアンスロンという活性成分になって瀉下効果を発揮します。また大黃中のアントラキノン類やリンドレインなどには抗菌・抗炎症作用があることも明らかになっています。大黃の瀉下効果は加熱に弱いので長時間煎じ過ぎると効果が減じます。

甘草は主薬の大黃を助け佐・使薬的な働きをしています。甘草はあらゆる意味で大黃と対照的な薬効を持っています。甘草の名は字の通り甘味が強いことに由来していますが性は寒熱どちらにも偏らない平です。甘草の機能は一応①補脾益気、②緩急止痛、③諸薬調和、④潤肺祛痰、⑤清熱解毒、など多様ですが、組み合わせられる相手の生薬やその時の状況によってその働きは多様になるので、単に機能を羅列するだけではその全体を言い表すことができません。この特徴を『本草備要』という最もポピュラーな本草学の参考書には「補有り瀉有り、表ニ能ク裏ニ能シ、昇ルベク降ルベシ。和剤ニ入レバ則チ補益シ、汗剤ニ入レバ則チ解肌シ、涼剤ニ入レバ則チ邪熱ヲ瀉ス。峻剤ニ入レバ則チ正気ヲ緩クシ、潤剤ニ入レバ陰血ヲ養ウ。能ク諸薬ヲ協和シテ之ヲ争ワザラシム。十二経ヲ通行シ百薬ノ毒ヲ解スガ故ニ国老ノ称有り」と、あらゆる場面で優れた調整能力を発揮する様はあたかも一国の長老の様な存在である、と書かれています。通常は直火で炙る、或は砂やフスマ

と共に炙った物を只の甘草と称して使用しています。採取した俣何も手を加えていない品は生甘草と云い主に清熱解毒の目的に用います。蜜で炙った品を日本では特に炙甘草と呼んで**炙甘草湯**など特に補益を目的にする場合に使用します。

甘草はウラル、シベリア、モンゴルおよび中国北部に分布するマメ科の多年草ウラルカンゾウの根から採った生薬で、洋の東西を問わず古くから薬として用いられて来ましたが、日本では自生せず、萱草とか、ヤブカンゾウとか呼ばれている物はユリ科の別物です。

甘草の成分ではグリチルリチンが有名で、ステロイド様作用、抗炎症作用、抗潰瘍作用などが知られ、新薬の成分にもなっています。副作用として偽アルドステロン症に因る浮腫、高血圧症、低カリウム血症などを起します。甘草は非常に多くの優れた特性を持つ反面、副作用や、処方中の他の生薬の作用を抑制して処方全体の働きを緩慢にする働きもあります。甘草一味を加えると方中の諸薬が互いに能く働いて効果が増すので必ず入れる場合と、甘草が入ると処方全体の働きが鈍くなり効果が薄れるので甘草は決して用いない処方とがあります。

大黄甘草湯の処方全体では大黄が胃腸実熱と溜まった大便を強力な清熱瀉下作用で排出一掃すると共に、その薬性の凶暴さを甘草が緩和して、腸の痙攣や腹痛を予防するので便通排便が円滑に行なわれます。ここでは瀉薬の**大黄**と補薬の**甘草**が実に巧みに組み合わせられています。

(便秘の諸証と類方鑑別)

便秘は胃腸内で食物が正常な通行を阻害される或は閉塞させられている状態ですから、それ自体は実証でそれを治療する瀉下剤は瀉剤に属します。しかし便秘を生じた原因即ちその本証を見ると、旺盛な病邪が在って強い邪正闘争が起り消化や排便が失調させられた完全な実証から、消化機能が虚弱で正常に便通が得られない虚証、さらにはそれに寒熱の要因や、或は気滞や瘀血など他の原因で便通が異常を呈したのものまで加えると、便秘の原因即ち本証は多種多様で、治療には証に合致した下剤が必要です。

大黄甘草湯は穏やかな瀉下剤ですから、通常の急性或は慢性便秘には病人の病名や寒熱虚実をあまり考慮しなくても広く使用できます。若し胃腸が冷えて消化管の動きが悪くなり大便が秘結した者には**大黄・附子・細辛**3味の**大黄附子湯**がありますが、エキス製剤が無いので加工附子末を加味するか、**大黄甘草湯**と**大建中湯**を併せて使うと良いでしょう。

胃腸実熱証で大便硬結し便秘が著しい時は**大黄甘草湯**に清熱・軟堅・通便の**芒硝**一味を加えた**調胃承気湯**です。

陽明病期で、高熱・腹部鞭満・便秘が顕著で、時に意識障害などを伴う強い便秘には**調胃承気湯**にさらに枳実・厚朴を加味した**大承気湯**が最も強力な攻下剤です。脳卒中後の発熱便秘などにも使用できます。

麻子仁丸は老人や虚弱者、病後の便秘向けの潤下剤で水分不足で乾燥しコロコロになっ

た大便を滋潤しながら便通を付けます。

その他上腹部が鞭満して便秘する者は**大柴胡湯**、メタボ傾向の肥満と便秘には**防風通聖散**、瘀血に因る便秘には**桃核承気湯**が適しています。